

いじめ 隠された

遠い真相

学校事件事故

①

11年 鹿児島・出水市立中2女子自殺

価した。市教委は同年11月に「直接のきっかけとなる出来事は確認できなかった」と結論付けた報告書を公表した。

遺族は14年4月、報告書の基になったアンケートの開示を求める訴訟を起こし、鹿児島地裁は15年12月、市に文書の開示を命じた。「『きもい』と言われるところを見た」「亡くなる数日前にスカートや私服を隠される、汚されるなどして友だちに『またやられた』と言っていた」。市が遺族への開示を拒んでいた文書には、いじめをうかがわせる記述がいくつもあつた。

遺族が市の安全配慮義務違反などを問う損害賠償訴訟でも新たな事実が判明した。今年3月、審理で明らかとなった専門委の議事録によると、会議には毎回委員5人の他に、市教委と学校から計8、10人が出席。議事録には「自殺の3日前、バッグを蹴(られ)る」「人間関係で悩んでいたことは事



中村真弥香さん

実」などの記載があった。「こわい。犯人捜しが始まっていく」と、事実解明に消極的とも取れる出席者の発言もあった。

文部科学省の指針は、児童生徒の自殺を調査する第三者委員会について、中立性の確保や遺族への配慮を求めている。今回、出水市教委は専門委を第三者委と説明

するが、市教委が選んだ委員は名前すら公表されていない。専門委から一度も聞き取りを受けなかった遺族は、透明性を確保した新たな第三者委による再調査を求めているが、市は拒否し続けている。

「委員の名前も分からず、委員より多数の市教委、学校関係者が参加した専門委は中立ではない。市教委は保身のため、事実を隠蔽した」。遺族は一層疑念を深めた。真弥香さんは、心臓の弱い幹年さんを気遣い「看護師になってじいちゃんを助ける」と話していた。幼いころ両親が離婚し、幹年さん

夫妻が親代わりとなり育てていた。亡くなる前日には家族で流しそうめんと買い物に行き、ピンクのTシャツを買ってもらい喜んでいった。「絶対に風化させない」。幹年さんはそう語り、口を真一文字に結んだ。

児童生徒の自殺や事故で、事実を解明すべき学校側や第三者委の調査に多くの遺族が不信感を抱いていることが、毎日新聞などのアンケートで浮かび上がった。「子供に何があったのか」。その真相から遠ざけられていると訴える被害者家族を訪ねた。 11つづく

訴訟で次々事実 再調査拒まれ



今年9月、鹿児島地裁であった損害賠償訴訟の口頭弁論の後、中村真弥香さんの吹奏楽部のTシャツを手に無念を語る祖父幹年さん—樋口岳大撮影